

川下の風景③

～人生は川の流れるように～

米津 達也

【世代】

戦後76年の夏を迎えたが、例年にも増して報道で目にする印象が薄いのは、新型コロナウイルスの話題と東京オリンピックの影響もあるのだろう。以前、広島原爆投下の日や終戦の日を知らない、と答えた若い世代のアンケートが出ていたが、ひょっとすると徐々にその機会は減っていたのかも知れない。

朝刊の投書欄に目を通すと、76年前の戦争体験を語る人々の声が生々しく掲載されていた。当時の事も、戦争の恐ろしさも実体験として知らない私は、それを読んで世代の声に耳を傾けているが、目に付くのは内容だけでなく、語る世代の高齢化である。大方、80代半ばから90代の世代の声。時の流れと共に世代が移り変わるのは当然であるが、私はこの世代の変化をケアマネジメントの現場でもひしひしと感じている。

戦前から戦後を生き抜いたクライアント世代。介護サービスを受けることに慎重で、人のお世話になることに常に感謝し、通所サービスでも提供される食事や入浴介助のひとつひとつに有難みを感じ、懐かしい童謡や昭和歌謡を皆で口ずさみ、手芸やボール投げに興じる姿。対価を支払ってサービスを受けているから、そこまで感謝する必要もないと思うが、支援者側にやって当たり前という感覚を打ち付けるほどに、その姿勢は受容的である。介護保険制度誕生から21年、クライアント世代も徐々に変化し、2025年には、いよいよ団塊世代が後期高齢者となる。急速な経済発展を支えてきた働くサラリーマン世代。それは、戦前から戦後を生き抜いた世代とは異なった価値観を持つ。24時間戦えますか？と揶揄されるほどに働いてきた世代は、自分たちで決めて、選択できた世代でもある。皮肉にも、やってあげて当たり前、という感覚で働いてきた介護福祉業界は、そういう世代の変化に鈍感だった。いつまでも自分たちが対象とするクライアント層は変わらない、なんて思ってきたんだろうか。

戦後76年、朝刊の投書欄を読み、この世代の変化に思う。戦争を生き抜いた世代は、決して私たち支援者の援助を有難く受け入れたのではなく、ただひたすらに、こうして生きていること、食べていること、笑って過ごせることに感謝しているのだ。

【介護する世代】

介護支援が必要な世代が移り行くと同時に、親の介護に携わる子供の世代も変化していく。

70代前半の夫婦。定年後、地域活動などにも積極的で、日々のウォーキングが趣味だった夫が、徐々に自宅に籠るようになってきた。親しい友人の死がきっかけで、葬儀の場でも塞ぎ込んでいたという。妻はおかしいな、と思いつつも、親しくしていた友人の突然の訃報だったので、時間が必要だろうと理解していた。しかし、

夫は一向に良くならない。意欲減退、食欲もなく、1日塞ぎ込む日々が続く。みるみる体重は減少し、筋力、体力共に低下していく。心配した妻に対しては暴言を浴びせることが多くなり、次第にトイレの排泄動作があやしくなってきた。医師からは、認知症と診断され症状を改善するような薬が出たが、食欲は改善せず1日寝ていることが多くなった。

子供は遠方の都市部で暮らす。世代的にも30代前半。子育ても仕事も忙しいが、父親のこと

を心配している。時期も悪く、コロナ感染症再拡大が懸念されたため、思うように帰省も出来ない。介護をしている母親からいろいろ情報は得るが、多分に主観が入った母親からの報告では要領も得ず、インターネットで得た情報を送ることが精一杯の協力だった。

核家族化というのは今に始まった事ではないが、二世世代前のように親と同居して、という感覚はとうに薄い世の中。最初から親と同居など考えずに、それぞれの生活場所を求めて家族を作っていくのは良いと思う。しかし、親が70代、子供が30～40代前半と、割に晩婚化の影響が出ている世代だと、双方に「介護」という意識が乏しい。ある日突然やってくる「介護」は、子供世代にとっても寝耳に水で、生活距離も離れて暮らしていると、親の変化に気づき難いし、受け入れ難い現実でもある。

【親の威厳、子供の決定】

戦後日本の高度経済成長期を支えてきた団塊の世代は、戦前から戦後の世代の父親像とは違った威厳を持っている。イメージしやすいのは、森田芳光監督作の「家族ゲーム」に登場する伊丹十三演じる父親。仕事バリバリ、妻は専業主婦で家の事と子どもの面倒を見ていれば良い。俺も頑張ったんだから、お前ら（子供ら）も頑張っただけで勉強して、良い大学に入って、良い企業に就職すれば将来安泰を思い描いていた世代。「経済成長」が世代に共通する基盤だったのだから、そんな価値観が強く影響する。自宅では着物を纏い、ちゃぶ台を囲んでドカンと座る父親像とは違うが、「働くお父さん」という印象を子供世代は持っている。そんな父親が70代で介護が必要になった、とは俄かに受け入れがたいのが子供世代の本音である。今や男性の平均

寿命も82歳に迫り、70代前半となれば、社会的には「若いお爺ちゃん」という印象が強い。人間、いつ、何時、とは頭で分かっている、まさかと思うもの。子供世代は離れて暮らしているから、余計に父親像がアップデートされていない。つまり、子供たちにとっては、いつまでも威厳ある存在であり、あたふたと介護に奔走する母親と隙間ができてしまう。こうなると、次に困るのが「決定」だ。誰が介護問題について決めていくのか。それはお父さんに聞いてみないと…？本人が決める、という前提はあるものの、徐々に適切に決められなくなる場合も多く、何より介護サービス云々ではなく、家族のことを決めていくプロセスにポカンと穴が開いたようになってしまう。

【選択肢と決定と】

「8050」とか、「ヤングケアラー」。誰がこんな言葉を考え、広めたんだろうと思うが、個々の背景要因はあるにせよ、その世代特有の社会の共通基盤が影響する価値観がある。今の我が子の世代であれば、「スマホ」「SNS」といったところで、特定の技術がどうというよりも、手軽に、都合よく「情報」をアップデートできる世代。76年前の社会とは大きく異なる。一方で、家族のことを、家族で話し合っただけで決める、というプロセスはどうなっただろうか。家父長制が強かった時代、働くお父さんを遠くから眺めていた時代、両親が対等に家事や子育てに関わる時代。どんな時代にあっても、家族の問題を当事者である家族が共有し、情報から選択肢を得て、決めていくプロセスに如何に関わるか。ケアマネジメントの場で求められる支援だと思っている。

2021.8.22 米津達也